

毎年、師走になると、『光陰矢のごとし』『歳月は人を待たず』という言葉の重みを実感します。今年も残すところ、後 10 日余りとなりました。しかしながら、今年は、年末特有の浮かれた感じや追い立てられている感じが少ないように思います。これも新型コロナ感染症の第 3 波による流行拡大の余波に他ならないのでしょうか。会議室は季節感に乏しいので、今日は華道部の皆さんが校長室に活けてくれたお花を持ってきました。いつもありがとうございます。皆さんもクリスマスを迎える気分を少し味わってもらえればと思います。

さて、今日も、今後の with コロナの社会を「君たちはどう生きるか」ということに関して、2点考えてもらいたいと思います。

ひとつは、浮き足立たずに『継続』することの大切さです。

世界的テニスプレイヤーとして活躍した杉山愛さんの母美沙子さんは、「実力を発揮できるかどうかは、普段の生活にかかっている」が持論だったそうです。私も部活動を指導しているときには口うるさく言っていました。「玄関の靴を揃える」とか、「自分は毎日、本を 15 分読む」というふうに、どんな小さなことでも「毎日、これをやるんだと目標を自分で決めて、コツコツ積み重ねていくと、その子に自信が生まれるということもあります。小さなことの積み重ねは、やがて目に見えない自信につながっていくのです」と話されています。また、イチローは「小さなことを積み重ねることが、とんでもない所に辿りつくただ一つの道」と言います。さらに、イエローハットの創業者鍵山秀三郎さんは『凡事徹底』という言葉で象徴されるように、掃除をすることを通して、「誰でもできることを、誰もやらないくらいにやる」という事を実践されてきました。

私も 60 年近く生きてきましたので、若い頃よりも、そのことの大切さを痛感します。『愚直の一念』という言葉があります。たとえ愚かでも、脇見をせずにまっすぐ進む、そうすれば、先が見え過ぎる、なまじっかな秀才よりも大きな仕事ができることがあるのです。

二つ目は、『継続』とも関連しますが、『笑顔』の大切さです。

P T A 新聞でも紹介しましたが、ある本の帯にあった「コロナ禍時代の頭と体が不安だっているけど、じゃあその前は、平和で安定していたの？」というコメントが最近すごく気に入っています。

コロナのせいにして嘆いても、現実が好転するわけではありません。先日お亡くなりになった小松政夫さんがよくモノマネをしていた、映画評論家の淀川長治さんが、毎朝、必ずしていたことが一つあって、それは、目が覚めたとき、こう言っていたそうです。

「今日は〇月〇日。（とその日の日付を言ってから） 今日という日は一度しかない。今日も一所懸命生きよう。だからニコニコしていこう。」

淀川さんはいつも笑顔が似合う人でしたが、何十年にわたる自分との約束を守った結果、あの笑顔は生まれてきたのでしょうか。

二つの話のまとめに、田口久人さんの、『きっと明日はいい日になる』から「続ける」とう詩を紹介します。

夢をかなえた人は 自分を信じ続けた人
運がいい人は 失敗から何度も立ち上がった人
好かれる人は いつも思いやりを忘れなかった人
愛される人は 心から愛し続けた人
幸せな人は 当たり前感謝し続けた人
どんなときでも どんなことが起きても
続けた人に明るい未来はやってくる

昨日、この詩を紹介しようとタイピング中、私は女子プロゴルファーの渋野日向子選手のことを思っていました。皆さんは、どうだったでしょうか。

とにかく、自分で考え、自分で悩み、自分で叱り、自分を励まし、自分がその気になるしかありません。イギリスの諺にあるように『馬を水辺に連れて行くことはできても、水を飲ませることはできない』のです。是非とも将来の自分と、そしてその自分と一緒に暮らしているかもしれない家族に対しての責任を果たしてください。その責任とは、今、人としての力を蓄えることなのです。

最後に、最終決戦を控えた3年生諸君、勝負に拘り、いわゆるゾーンに入っ
て、わき目もふらず勉強してください。本当に学問の面白さが分かり始めた人は、いたずらに過ごしてしまったこれまでの日々を、今、後悔しているでしょうが、それは、いよいよ人としてワンランクアップした証拠なのです。過去は変えられませんが、未来はいつでも変えられます。人生に遅すぎるということはありません。2次試験が終わるまでには、まだまだ時間があり、いくらでも伸び代があります。苦しい時間が長ければ長いほど、自分は成長しているのです。「一刻もはやく楽になりたい」という気持ちをぐっところえて、試験最後の5分間まであきらめずに全力投球することをお願いします。

それでは、皆さん、感染には細心の注意を払いながら年末年始を過ごし、新学期に、元気な笑顔で再会しましょう。